

医療経済学で読み解く医療のモンダイ

真野俊樹 著

＜書評者＞ 山内一信（藤田保健衛生大学教授・医療管理情報学）

現代の医療界にはさまざまな問題、課題がある。特にその仕組みを社会的、経済学的、さらには医療機関のマネージメント機能からとらえる視点は良質の医療を行ってゆくための医療提供体制を考える上で重要である。このほど、これらの問題をわかりやすく解説した『医療経済学で読み解く医療のモンダイ』（真野俊樹著）が医学書院から発刊された。

医療経済学の多くの成書は「経済学とは」という解説から大上段に振りかぶり、経済を成立させている需要・供給の問題に触れ、市場経済、統制経済の解説、そして医療は市場経済にはなじまないの、統制経済の要素が強いにもかかわらず医療費は増大し続けることを述べ、少子高齢化が進み負債が増大する日本の経済基盤の中で、どのように良質で効率的医療を達成したらよいのかという流れが一般的である。このような論旨の展開では、まず経済学とは何かという難関に立ち向かうことになる。

そこで、著者・真野は医療が抱える現実の問題は何かということを設定し、その問題を経済的要素からとらえるところから切り込む。「はじめに—医療経済学の考え方」では、経済学は自然科学と異なり真実を定めにくい学問であることを指摘し、その考え方として、①計画経済と、②合理的経済人をベースにした方法論的個人主義、市場

経済を、さらに新しい考え方として非経済的動機を重視した経済社会学を取り上げている。

第1章では医療費はどう成り立ち、なぜ増大するのか、また医療費が高くなることは問題なのかどうか、といったテーマを扱い、第2章では保険の仕組みを解説し、第3章で医療の仕組みを経済学の論理から切り込んでゆく。

医療費については国際的にみて高くないことを示し、増加の原因として人口高齢化、技術開発、出来高払い、サービス産業としての特異性などを挙げている。保険については、その根本は所得再配分（移転）であることを指摘。保険者の役割として予防医療、疾病管理の重要性を挙げた。DPCは包括評価ではあるが、基本的には出来高制であり、医療費抑制への効果は少ないものの、ベンチマークを通してミクロ的効率化に役立つ可能性を指摘した。

第3章では前章からの効率化の論点を受けて費用対効果などの経済性分析の解析法、効率化の意味、機能分化・医療連携の方向性、病床数削減、医療従事者の増加、人件費と疲弊の問題、公立病院での官僚的組織の構造的な問題と統合・再編・民営化への課題、さらに市場の失敗が起こる原因と診療報酬が公定価格であることの意味、医療サービスを行う側の差別化の必要性、そして最後に医療の質・評

価をどう判断するのかを示し、評価には患者満足度だけでは不十分であるとして、臨床評価の重要性を説く。

最終章では、米国、英国、フランス、ドイツ、さらにはタイ、韓国、シンガポールの医療制度を紹介し、日本の医療制度を見直す機会を与えている。

本書の特徴である医療のモンダイを経済学的に解析するという視点は、著者が今までの多くの著作を通して考えついた視点であろう。本書の特徴は図や表が多く、それが最新のもので分かりやすくまとめていることである。また、各項の終りにはその項で述べた論点を要領よくまとめている。したがって、ある程度経済学を理解し、かつ忙しい方はこのまとめと図表とをじっと見ることににより、著者の言いたいことがわかるのではないかと思う。またコラム欄は最近もつとも話題性の高い内容、例えば「保健指導」「医療訴訟」「医療機器業界」などについて経済学的解釈を加えて解説している。

本書は、医療の仕組みは経済学的観点からこうあるべきであるという論点よりも、「医療のモンダイ」を経済学からみるとこう解釈されるという視点が貫かれ、経済学的に読み解くための有用な成書であると確信している。

●A5 頁 232 2008 年
定価 2,625 円
(本体 2,500 円 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-00659-0]
医学書院 刊